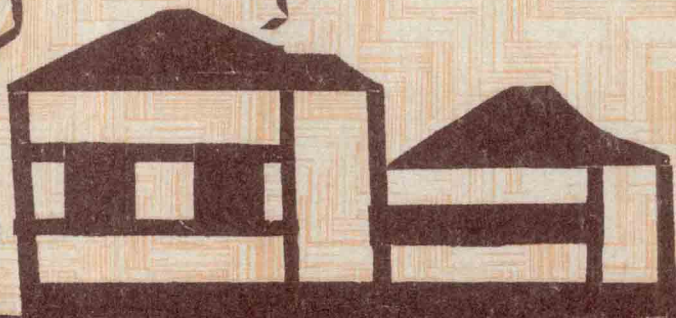


インド綿の服

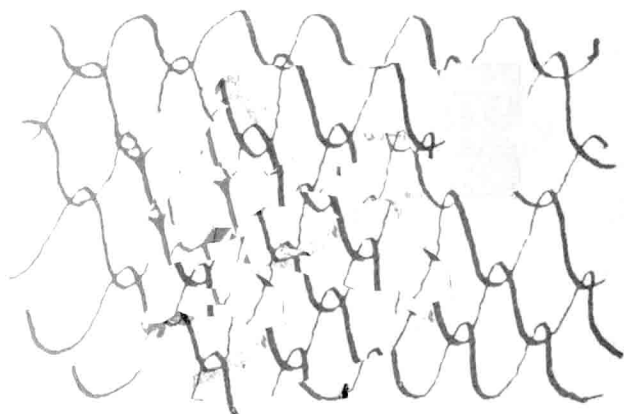
三潤野庄

ALOGON RES



インド綿の服

庄野潤三



講談社

インド綿めんの服ふく

昭和六十三年二月九日 第一刷発行

著者——庄野潤三しょうのじゆんぞう

©Junzo Shono 1988, Printed in Japan

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—三—三 郵便番号二三 電話東京三—九望—二二（大代表）

印刷所——株式会社精興社 製本所——藤沢製本株式会社

定価——一二〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取替えます。

なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第一出版部あてにお願いいたします。

目次

インド綿の服

7

大きな古時計

25

楽しき農婦

45

雪の中のゆりね
69

誕生日の祝い
95

足柄山の春
145

あとがき
191

装幀 川島羊三

インド綿の服

インド綿の服

去年の三月に南足柄市に引越した長女の一家は、天氣のいい日には遠くに相模湾が見える山の、雑木林の中の家で二度目の夏を迎えて息災に暮しているが、先日、長女から八月六日に行われた市の水泳大会の二十五メートルのクロールに小学四年の上の男の子が出場したと知らせて来た。

こちらにいる時は泳げなかった子だから驚くべき出来事に違いないが、それよりもスコットランドの花の写真入りの書簡箋いっぱい、そんな洒落たものには不似合いな、まるまっちい字でしるされた手紙の、

「暑中お祝い、申し上げます（我ら亜熱帯族の言葉）」

という書出しの方に私たちはもっと面喰った。

いつも長女からの通信は妻が声を出して読むのが習わしになっている。そうして、妻からのいろんな物を詰め合せた小包が届いた場合は別として（スコットランドの花の写真入りの書簡箋と封筒も春さきに妻が送ってやったものだが）、たいがいは「足柄山からこんにちは」で始まるのが多かったのである。

私はもう一度、読み返すように妻にいった。こちらの聞き間違いではなかった。「全く何をいい出すやら分らないな」

「そうですね」

一通の手紙の中にひとところや二ところは笑わせたり呆れさせるような言葉を書きつける。どうやらひとりでにそうなるらしい。つまり性分というわけだが、この奇妙な挨拶にもそれ相応の理由がある。

先ず私たち親子は昔からずっとそうなのだが、夏の日差しが強ければ強いほど喜ぶ性質があり（その代りみんな揃って寒がりだが）、海の水につかる時、何ともいえず心が安らぐのは、われわれの先祖が南の島から八重の潮路を越えて流れ着いた（私たちの年代の者には殊に忘れられない歌曲「椰子の実」のように）人

間である証拠ではないだろうかと常々話し合つて来たことを承知して頂きたい。いまでは私は海水浴場の浜べに群がる人の中で自分よりも年長の人を見つけるのが難しくなりつつある。

次にそういう私たちにとって去年は甚だ意氣銷沈させる夏であつたことを思い出して貰いたい。ここに「足柄山」から長女が寄越した二通の手紙がある。その一節を紹介したい。はじめのはお盆が終つたあとに届いた。

「今年の夏は、お父さんの汗の出が悪く、海水浴にもちょっとしか行けなくて、残念でした。地球が変になつてゐるのではないかと思つて、新聞やテレビの氣象関係のニュースを注意深く見ましたが、原因は究明できませんでした。(セントヘレナの火山灰説とかいろいろあり) だんだん日の暮れが早くなり、かなかなの聲が一段と耳につき、夏も終りに近づいてゐるのだなあと思います」

自然科学への関心が薄い家族の中でこの子だけが中学の頃から新聞の天気予報の欄を読むのが大好きで、気圧配置がどうなつてゐるといふような受け売りをよく口にしてゐた。三人の子供の母になつてもその癖は変らないらしい。もう一通

は九月に入つて二週間たつてから届いたもの。

「生田の皆様こんにち。夏が逆戻りしたというより、いま頃になって夏らしくなつたというべきですが、暑い日が続き、夏はこうでなくっちゃと喜んでいます。でも日暮れは早くなり、芒は穂が出て、どんぐりは霰あられのように降り、やっぱりもう秋ですね。こちらは学校が始まり、夏の間のあの賑やかさが嘘のように静かになりました。花壇のニワトリ除けの金網を張つて、コスモスを植え替えたり、絶え間なく降つて来るどんぐりを掃いたり（庭に何千個というどんぐりが落ちます。ニワトリが食べてくれればいいと思うのに知らん顔です）庭の手入れをしています。やっと時間が出来て、お約束のインド綿の服を作りました。来年用になってしまいました、ご免なさい。来年の夏、すぐに着て下さい。レースを附けた方が似合いそうで、勝手に附けてしまいました。ウエストのゴムの位置を下げました。丈も少し長目になっているかも知れません」

八月半ば過ぎの妻の誕生日までに仕上げるつもりでいた夏のふだん着を送る小包に添えられていた手紙である。どうして一月近く遅れたかという、金時が産

湯を使ったという夕日の滝まで「朝飯前のドライブ」で行って来られる山に家を新築したお蔭で（主人の勤め先は横浜にあるので、通勤に要する時間は引越す前と大して変りはなかった）、それまで九年間、親しく往き来していたもとの家のお隣りのたかちゃん一家に主人の学校友達など、避暑の気分を味わいたい来客が七組もあり、お蔭で民宿「あしがら」は大繁昌。朝から晩まで食べるものをこしらえるか、買出しに行っているという日が続いた。洋裁どころでなかったのも無理はない。

天気の話に戻ると、今年もはじめのうちは二年続きの涼し過ぎる夏になるのではないかという予測があり、気が揉めた。それが有難いことに外れたので、暑中お見舞いが暑中お祝いに変ったというわけである。それにしてもこういう駄洒落ともつかぬことを口にするのは長女の昔からの癖で（癖がいくつもある）、さっきの八月の手紙の方には、夏の間中、あっちこっちみんな歩いて自然の美しさに目をみはりました、山道で顔のまわりを霧が流れて行くの、子供たちの取ったかぶと虫も九十匹を越え、先日、山の奥の奥へ逃がして来ましたと報告したあと

へ、

「ニワトリはこの頃、ソトトリと呼びたいほど、遠くまで遊びに行ってしまう。卵は一日、二、三個。そして近所の人に、稲村さんの家のニワトリ、スキップしているわといわれるくらい、飛んだり跳ねたりしています」

とあった。

前にいった通り、この長女は何をいい出すか分らないところがあって、今年の六月の終りのことだが、小田原の駅前で待ち合せて、こちらから出向いた妻と長男の嫁との三人で昼御飯を食べ、城跡の公園を歩いたり、お茶を飲んだりした日に寄越した葉書の始まりは次のようであった。

「ウーマンズ・ミーティングの後援会長の大株主の後見人の陰の黒幕の父上殿。本日も多大なる出資をして頂きまして、真に有難うございました。お蔭さまでおいしいイタリア料理や豪華なデザートをたっぷり食べて、溜っていた話をして、本当に楽しい一日を過ごすことが出来ました」

そのあと、日頃、行いのよい三人が梅雨の雨雲を吹き飛ばして快晴にしてしま